

## ◆◆東風吹かば・・・◆◆

## 1) ウィルスと花粉のダブルパンチ

インフルエンザの流行はピークを越えたといわれるものの、まだまだくすぶり続けています。麻疹（はしか）と豚コレラの感染拡大も懸念されており、関係者は封じ込めに苦労されているようです。

一方で、寒さが緩むと花粉症のシーズンが本格化します。

また3月は、「比良の八荒」といって、寒暖差によって「風」が吹き荒れる季節でもあり、腰や関節の症状を悪化させやすいシーズンでもあります。

ウィルスと花粉や風は病因としては別物ですが、漢方では、六つの外邪（風邪・寒邪・暑邪・湿邪・燥邪・火邪）のうちの「**風邪（ふうじゃ）**」に属する点で共通しています。

東風はうらかな陽気とともにそうした邪気も運んでくるのですね。

## 2) 屏風の働きをする守りのオウギ

風邪（ふうじゃ）は皮膚・粘膜から体に侵入してきますが、それを玄関で防ぐ屏風の働きをするのがオウギです。**オウギ**を主薬とする**衛益顆粒（えいえきかりゅう）**の原典の名前、「玉屏風散」がその特徴を端的に物語っています。

オウギは甘草同様に、中国黄河以北の砂礫地帯で、地表面を覆うように根や地下茎を縦横に伸ばして生えています。乱獲によって土地の砂漠化が問題になっています。

その学名、*Astragalus membranaceus* からも、本種が人体の表面だけでなく、地表の膜（membrane）となって内部を守っている役割が広く認識されているとうかがわれます。

地表を砂漠化から守る働きの植物が、ヒトの皮膚や粘膜の免疫力を高め内部を守る。

地球環境も人体の環境も一つと見る天人合一の大局観は、話としてはあまりにも出来すぎていて、にわかには信じられませんが、実際にオウギを使ってみると、ますます不思議のとりこになってしまいます。

同様の不思議は、衛益顆粒にオウギとともに配合されている**ボウフウ（防風）**でも確かめることができます。海岸の砂浜で見たハマボウフウは、強風の中で根を縦横にのぼし、砂浜を砂の流出と風化から守っていました。衛益顆粒は呼吸器粘膜のIgA（免疫グロブリンA）の分泌を増やすことが分かっています。



花粉症に対して、衛益顆粒の主薬オウギを使うのは、化学合成薬と比べて次の利点があります。

- i) 症状が出てからでも一定の効果がある。ii) 口が渇かない。iii) 眠くならない。
- iv) 妊産授乳婦でも可。v) 粘膜の抵抗力を上げる点で原因療法に近い。

## 3) 攻めの解毒

昔、都の裏鬼門を守っていた石清水八幡宮の節分神事が面白いと思いました。神楽女が熱した神水をササの葉で振りまき、湯をくぐらせたササや釜の湯がふるまわれます。その後、桃の枝をつけた弓で四方を清めた後に豆まきが行われます。

ササの葉は松寿仙や天津感冒片、涼解薬にも含まれる穏やかな解毒薬で、桃は、その種（トウニン）が血府逐瘀丸（ケップチクオガン）に含まれ、古血（ふるち）を解毒する重要な役割を担っています。

この冬、バンラン茶、バンランのど飴がとてもよく出ました。板らん根は春に開花するホソバタイセイというアブラナ科の薬草の根です。攻めの解毒薬としての効果が、着実に支持を拡げているものと思います。

